

新刊評 詩歌の本棚



詩集 河津 聖恵

がです。／みなさん天気は死にました／死んだとはいえず天気はあります／狂天動地の天気ではありませんが／前人未到把握不能のお天気ですが「みなさん天気は死にました／秦の始皇帝はかりではありませぬ／あらゆる時代のあるゆるめ政者は／天気のことを気にしながら天気をも憎みました／思い通りにならないもの／すくへの貴 賀茂川の水 僧兵いれ一番思ひ通りにならないものは 天気のことろぞいります」

今現代詩の存在意義が見えにくい。書店の詩の棚はもはや短詩派が主流だ。社会の急激な変化に人々が抱く危機感に対し、このジャンルは応答が遅れているからだろう。個人の物語に閉ざされた詩も漫然と増えているようだ。だがそれももはや現代性を根拠とするジャンルだ。戦後詩のようには際立つことはなくとも、今の現代詩に固有の形で時代に共振する方法はかならずあると思う。

鎌田東二『狂天動地』(土曜美術社出版販売)は昨年から刊行の続々『俳詩』『歌』の続編を飾る。「詩を書く始めて五十年、半世紀を経過して自分なりのけじめをつけたい気持ちをこぼれた」。その



鎌田東二『狂天動地』

よすな本詩集では、宗教青年書でもある作者の詩の原点をテーマとする作品もあり興味深い。神秘的体験に近き記憶を足場として、人災でもある現在の天変地異がもたらす世界の混沌に向き合ふ。作者は群をかな「最後の言葉を放つ。」「つむひ／風は寝て来たてな直後に眠った連作」「みなさん天気は死にました」は、盛大な披露の光景を彩るすも重なり、調子を交錯させて来た。表題は、五十年前作者が投稿欄で出会った高校生の詩の題名だといふ。「田村道」のその言葉が作者の中で「嵐の響き」になり、「初期を筆を田」「本詩集だ」結果、「だ」なのだ。天気の死の行方を追いつつた五十年の風「田村君」の一行は、作者の詩作を支え導いて来たことになる。

「みなさん天気は死にました」／君の準備はできていますか／／かなりの準備はできていますか／／君の準備はできていますか／／君の準備はできていますか

「準備はできていますか」／「準備はできていますか」／「準備はできていますか」／「準備はできていますか」

「準備はできていますか」／「準備はできていますか」／「準備はできていますか」／「準備はできていますか」

(詩人)

京都新聞 2019年11月4日(月)